

# コメニウスの『世界図絵』1662年版に 関する一考察

井ノ口 淳 三

## A Study of the Revised Edition of “Orbis sensualium pictus”

— Mainly in the case of the 1662 Edition —

JUNZO INOKUCHI

### Abstract

The book “*Orbis sensualium pictus (the Visible World by the Sences)*” by John Amos Comenius (1592 ~ 1670) was printed in Nuremberg in the year 1658. It is well known as the first textbook with many illustrations in the world. Therefore there are about 260 revised editions. In this paper I consider about the 1662 edition of them. Because it has the significance. It changes from the first edition. It was adopted as one of the original text, when *OPERA OMNIA (The complete works of J. A. Comenius)* was edited in 1970. And we can study if it is the original text of the first Japanese translation in 1739 by Gonza (1718 ~ 1739), who was a young Japanese drifter, or not. But the 1662 edition does not necessarily agree with the translation by Gonza. I consider that the 1685 edition is similar rather than the 1662 edition. We need to study about the 1685 edition also.

Key words : Comenius, Gonza, *Orbis sensualium pictus*

## 1. 『世界図絵』1662年版の意義と特徴

コメニウス (Comenius, チェコ語名 Jan Amos Komenský 1592 ~ 1670) の『世界図絵』(Orbis sensualium pictus, 1658) は、初版以降およそ 350 年間に少なくとも 260 種類以上の異版本が出版されており、新たな出版も引き続き行われている。それらの数有る異版本の中で、本稿では 1662 年にニュルンベルクで刊行されたラテン語・ドイツ語対訳版についてその内容を検討する<sup>1)</sup>。その理由は、主に次の三つである。

まず第一に、この版がコメニウスの生存中に初版と同じ版元から刊行されたものであるにもかかわらず、いくつかの点で初版とは異なる特徴を備えたものだからである。それゆえ現在チェコで刊行中の全集を編集する際に底本の一つとして採用されていることであり、これが第二の理由である<sup>2)</sup>。そして第三に、上記の特徴により 18 世紀において漂流青年ゴンザが薩摩弁に翻訳する際にテキストとして採用した版を推定できる可能性を持っているからである<sup>3)</sup>。

それでは、この 1662 年版の特徴とは、どのようなものであろうか。それについて、1970 年に刊行された全集の巻末に付されている解説を参照してみよう。この全集には、ラテン語、ドイツ語及びチェコ語による解説があり、それぞれ異なった内容が記されている。ラテン語による解説の執筆者は、チェコ共和国科学アカデミーのヤロミール・チェルヴェンカ博士 (Jaromír Červenka)、ドイツ語はスタニスラフ・クラーク博士 (Stanislav Králík)、そしてチェコ語はマルタ・ベチュコヴァー博士 (Marta Bečková) が担当している<sup>4)</sup>。

ラテン語による解説は、二つの部分から構成されており、前半部は『世界図絵』の原型とも言うべき著作である『照らされた言語の前庭と扉』(Vestibuli et Januae lingvarum lucidarium, 1653) について、その作品の出版に至る経過と研究史についての説明がある。そして後半部が『世界図絵』に関する内容で、コメニウスがニュルンベルクの印刷所から出版したいきさつなど彼の生存中の事柄と 1670 年に亡くなった後の刊行史とに時期区分をして説明がなされている。解説のこの構成と内容は、全集の第 17 巻が上記の二つの著作を中心にして編集されていることを反映したものであるが、刊行史をたどることが本稿の目的ではないので、それに関する紹介は、本稿では省略する。

1662 年版については、それを第 3 版であるとし、その後の異版本に影響を与えた重要な版であると説明している<sup>5)</sup>。そしてそれが多くの箇所では初版と変化しており、単語の索引を設けていることを指摘する。さらに第 138 章には、文章が増補されていることや第 38 章の挿絵の中の女性の髪がきれいに整えられ身体の前を隠していることなどを具体的に述べている。最後に全集の底本についての説明があるが、これについてはチェコ語による解説の方が詳しいので後述することにする。

次にドイツ語による解説は、主に『世界図絵』のドイツ語文の著者が誰であるかという問題と

17世紀におけるドイツ語文の様々な変化の形について例をあげて説明している。そしてコメニウスはドイツの大学に留学し、ドイツ語もできるので大きなかわりを持ってはいるが、彼がドイツ語文を執筆したとみるのは正しくないという立場をとっている。いずれにせよ、1662年版のことについては触れられていない。

1662年版に最も多く言及しているのは、チェコ語による解説である。この中でも前半は『照らされた言語の前庭と扉』について説明し、後半を『世界図絵』の説明にあてている。そして『世界図絵』について、この全集（批判版）では1658年にニュルンベルクのエンター出版社から刊行された初版にAという記号を付していること、ただし、この全集は状態の良い1659年の第2版（ポーランド科学アカデミーのグダンスク図書館所蔵、B'と記す）に基づいていること、同じ1659年の第2版でもニュルンベルクの市立図書館やオロモウツのバラツキー大学に所蔵されているものには植字上のわずかな欠点があり、Bという記号を付して区別していることを説明している。さらに1662年の第3版（プラハのチェコ国立博物館所蔵）をCと記し、1659年の第2版のB'に対する変化を次のように述べている。たとえばラテン語のアクセントに印がつけられていることや挿絵が変化していること、序文や第138章に補足がなされていることや欄が三つになって辞書編纂への配慮がみられることなどである。いずれにせよ、1970年の全集は、1658年の初版をそのまま復刻したものではないことがわかる。

それではこれらの変化について順次検討してみよう。

## 2. 『世界図絵』1662版の主な変更点

1658年の初版と比べて1662年版の挿絵の一部に変更点のあることは、すでにラテン語による解説の指摘を紹介した通りである（図1及び図2参照）。それは、第38章の女性の描き方についてなのであるが、およそ150ほどある挿絵の中で変更点は、唯一それだけしかない。後はすべて初版とまったく同じである。なぜこの女性の姿が変化したのかは不明であるが、一般的には性の表現に関する「教育的配慮」の可能性も考えられる<sup>6)</sup>。

次に形式上の特徴についてであるが、1662年版ではラテン語とドイツ語の文章に加えて第3欄が設けられ、本文中の主な単語が抜き出されている（図4参照）。それらの多くは名詞であるが、形容詞も見られる。そして本文の単語の性と格が記されている。この第3欄に抜き出されていない名詞は、ラテン語本文の中に直接性と格が指摘されているのも初版とは異なる特徴である。このことによって、1662年版では文法に配慮しつつ意味を理解する工夫がなされていると言える。

さらに1662年版では巻末に単語索引が添付されている。それはラテン語では58ページ、ドイツ語では50ページに及ぶ膨大なものである。この索引を活用すれば、個々の単語が実際の文章の中でどのように使われているかを理解することができる。



图1 1658年版



图2 1662年版



图3 1685年版

(2)		(3)	
Invitatio.	Einleitung.	L. Ich will dich füh-	
		<p>M. Ducante. per omnia: ostendam tibi omnia: nominabo tibi omnia. P. En! adsum! duc me, in nomine Dei. M. Ante omnia debes discere simplices sonos. ex quibus constat sermo humanus: quos, animalia sciunt formare, &amp; tua lingua scit imitari, &amp; tua manus potest pingere. Postea ibimus in mundum, &amp; spectabimus omnia. Hic habes vivum &amp; vocale alphabetum.</p>	
<p>M. Veni, puer! discere sperere. P. Quid hoc est? sperere. M. Omnia, quae necessaria, recte intelligere, recte agere, recte loqui. P. Quis me hoc docebit? M. Ego, cum DEO. P. Quomodo?</p>	<p>L. Komm her/ Knab! lerne klug seyn. S. Was ist das? Klug sehn. L. Alles/ was nöhtig ist/ recht verstehen/ recht thun/ recht ausreden. S. Wer wird mich das lehren? L. Ich/ mit Gott. S. Welcher Gestalt?</p>	<p>Puer, m. 2. der Knab.  Omnis, c. 1. e. n. 3. alles. Necessarius, 2. um, nöhtig.  Deus, m. 1. der Gott.</p>	<p>Lren/ durch alle Dinge: ich will dir zeigen, alles: ich will dir benennen alles. S. Siehe! hier bin ich! führet mich/ in dem Namen Gottes. L. Vor allen Dingen/ mußt du lernen die schlechten Stimmen/ in welchen bestehet die Menschliche Rede: welche/ die Thiere wissen abzubilden/ und deine Junge weiß nachzumachen/ und deine Hand kan mahlen. Darnach wollen wir gehen in die Welt/ und wollen beschauen alle Dinge. Hier hast du ein lebendiges und stin- [bares] Alphabet.</p> <p>Nomen, n. 1. der Name,  Simples, v. 3. einfach/ (einfach). Sonus, m. 2. die Stimme,  Sermo, m. 1. die Rede. Humānus, um, Mensch- lich. Animal, n. 3. das Thier. Lingua, f. 1. die Zunge. Manus, f. 4. die Hand.  Mundus, m. 2. die Welt,  Virus, 2. um, lebendig. Vocalis, c. a. n. 3. stimmbar. Alphabetum, n. 2. das Alphabet.</p>
M. Du		A:	Cormix

図4 1662年版

巻末のチェコ語による解説では、このような1662年版の特徴は、必ずしもコメニウス自身の発案によるものではなかったようであるが、反響は大きかったと思われる。

次に本文の差異について見ていくことにしよう。1662年版を初版と比較するとラテン語文では32の章、ドイツ語文では92の章において差異が見られる<sup>7)</sup>。しかし、これらのほとんどは、冠詞の差し替え、語順の前後入れ替え、名詞の語尾の変化、単数と複数の違い、前置詞や代名詞の交換、接続詞の追加、さらには単純な誤植というようなものであり、意味の変化にまで及ばない差異なのである。初版と意味が異なるものは、わずかに次の数箇所にすぎない。

まず、第9章「大地の作物」のドイツ語文において、初版では「畑は穀物や野菜を実らせませす」という文章が、1662年版では「耕された畑は穀物や野菜を実らせませす」となっている。

同様に第19章「家禽」のドイツ語文において、初版では「つばめ、雀、かささぎ、からすおよびこうもり（翼のあるねずみ）は、屋根の付近を飛びまわります」という文章が、1662年版では「つばめ、雀、かささぎ、からすおよびこうもり（翼のあるねずみ）は、家の付近を飛びまわります」と変化している<sup>8)</sup>。

さらに、第84章「車両」のドイツ語文において、初版では「十二の外縁と同数の輪鉄から組み立てられた輪がこれを取り巻いています」という文章が、1662年版では「六つの外縁と同数の輪鉄から組み立てられた輪がこれを取り巻いています」に訂正されている<sup>9)</sup>。

また、第103章「天球」では、初版の「二つの回帰線（北回帰線、南回帰線）および二つの極軌道です」という文章が、1662年版ではラテン語文とドイツ語文のいずれにおいても「二つの回帰線、北回帰線と南回帰線（ちょうどこれらは夏至と冬至の目標であり同様に太陽の運行の境界石です）、および二つの極軌道、つまり北と南のです」と補足されている。

そして、1662年版ではラテン語文とドイツ語文のいずれにおいても第107章「地球」の二つの半球をaとbとの記号を使って区別するのではなく、aを「上の半球」、bを「下の半球」と表現している。この章では、章題だけではなく本文でも微妙な変化が見られる。たとえば、「地球は丸いです。したがって二つの半球a-bが提示されなければなりません」という文章が、ラテン語文とドイツ語文のいずれも「地球は丸いです。したがって二つの半球が形成されなければなりません」と変化している。また「世界とくらべれば」という表現も「世界全体とくらべれば」という具合に意味を強める言葉が補足されている。また、初版ではbにあたる後半でも、「アメリカでは、住民は私達と正反対の側にいます」というドイツ語文が、「正午および真夜中であるアメリカでは」と補足されている。

1662年版が初版と最も大きく異なる箇所は、ラテン語文とドイツ語文のいずれにおいても第138章「王の尊厳」の最後に次の文章が追加されていることである。すなわち、「ローマ帝国には最高の支配者である皇帝がいる。それは八人の選帝侯から選挙で選ばれる。それは、マインツ、トリエル、ケルンの三人の大司教と、五人の世俗の支配者、つまり、ボヘミア王の大シェンク、バイエルンの大公である大トルフゼシュ、ザクセンの大公大マルシャル、ブランデンブルクの辺境伯である大ケメラ、そして宮中伯の大シャッツマイスターである」。

『世界図絵』の初版と1662年版との間には、少なくとも以上の相違点がある。そこで次にこれまでの考察に基づいて、ゴンザの翻訳の底本となったのは、果して1662年版であるのかについて検討してみよう。

### 3. 1662年版とゴンザの翻訳との比較

ゴンザによる『世界図絵』の翻訳というのは、ロシア科学アカデミー図書館司書補のボグダノフ（Богданов, А. И. 1692～1766）がロシア語に翻訳したものを、彼の指導を受けてゴンザが1739年にさらに当時の鹿児島方言で逐語訳したものであり、キリル文字で表記されている。この翻訳は手書きであるが、挿絵はまったく存在しない。したがって、挿絵の特徴によって底本を推測することはできない<sup>10)</sup>。

ゴンザ訳では、冒頭に「アルファベットによる章索引」が付されているが、1662年版では巻

末に添付されている。しかし、この「アルファベットによる章索引」は、初版を含めて多くの版に共通するものであり、特に底本を識別する手がかりにはならない。

ゴンザ訳でもロシア語と薩摩弁との対訳の他に第3欄が設けられている。しかし1662年版が本文中の名詞を中心に抜き出しているのに対して、ゴンザ訳では、動詞も含めて本文中のほとんどすべての単語を抜き出している。たとえば、最初の「入門」という箇所では、次のようになされている。

1662年版……少年、すべて、必要な、神、名前、簡単な、発音、生物、舌、手、世界、生きた、声の、アルファベット。

ゴンザ訳……キラル、ワラベ、ナラフ、ディクナコトスル、イケナコトガゴザル、ソゲナト、スヨ、ソイ、イルト、スグ、シッチョル、スル、キツパイトユ、ダイ、オイ、コイ、オソユル、フォドケ、イケナト、ナイ、ツイエチイク、コナタ、モノ、ミスル、ナオユ、シュ、オル、ナ、フォドケント、ファヨカラ、シェニヤナラン、タダント、コイエ、ドノト、タッチョル、ナ、フトント、ケダモン、シッチョル、キツパイトスル、シタ、コナタン、ソノト、オボイエチョル、チュ、ナル、カク、ソシチ、イク、シェケ、ミル、コケ、モッチョル、イキタト、コイェント、イロファ。

ゴンザ訳の中で下線を引いた単語は、1662年版と共通している単語である。両者を比較してみると、ゴンザ訳ではいかに多くの単語が抽出されているかがわかる。しかも「ナ（名前）」のように同じ単語が二度引かれている例もある。また、「神」を「フォドケ」、「アルファベット」を「イロファ」と訳している苦心も理解できる。これらの点は、この「入門」の箇所だけではなく、以下の150の章にも共通するものである。

このように第3欄を設けて単語を抽出するという形式は、初版には見られなかったものであり、1662年版で初めて登場したものである。しかし、両者の抽出している単語量の差はきわめて大きいので、はたしてボグダーノフとゴンザが『世界図絵』のどの版によってロシア語訳及び鹿児島方言による翻訳をしたのかは、これだけではまだわからない。可能性としては、次の三つが考えられる。①1662年版に示唆を得た。②1662年版に影響を受けた後の版に依拠した。③彼らが独自に工夫した。つまり、①の場合である可能性も残されているし、②の場合であるとしても1662年版の持つ意義は大きいと言える。そしてもし③であるならば、ボグダーノフとゴンザの発想の豊かさを示すものとなる。

1662年版には巻末に膨大な単語索引が添付されていることをすでに指摘したが、ゴンザ訳にはそれは存在しない。ゴンザ訳ではそれを省略するかわりに本文中に抽出する単語を増加したとも考えられる<sup>11)</sup>。

いずれにせよこれまで見てきたように、形式の面ではボグダーノフとゴンザが『世界図絵』のどの版を底本にしたのかを推察する決め手はなかった。そこで次に本文の記述を手がかりにして考察をすすめてみよう。

1662年版の特徴である箇所として、まず第9章「大地の作物」がある。ゴンザの訳では「ファラ モッチゴザル デェクルコト クサナンド（原は 持って御座る 出来る事 草等）」となっており、「ファラ（原）」に形容詞はつけられていない。この訳は、ドイツ語文だけを見ればむしろ初版と共通するものである。しかし、二つの版のラテン語文には相違がなく、しかもゴンザの訳はラテン語文に即した内容であるから、この箇所は底本を推定する上で参考にはならない。

次に第19章「家禽」のゴンザ訳では「ファネゲモッタ ネヅミャ トブ イェナン ドンワキ（羽根毛を持った 鼠は 飛ぶ 家等の 脇）」となっている。江口氏は、この部分のボグダーノフによるロシア語訳が「羽根のある鼠（こうもり）は家等の周りを飛ぶ」となっていることを紹介した後で次のように述べている。「通行の『図解感覚世界』（『世界図絵』）では「circa domas（屋根の周りを）」であるが、1662年版の『図解感覚世界』（『世界図絵』）のドイツ語訳では「um die Hauser」（家を）であり近似する。こうした点から1662年版に近い一本から訳出が行われたらしい。但し1662年版そのものかという点必ずしも限定できない」<sup>12)</sup>。

たしかにドイツ語文だけを見れば、初版の「屋根の周りを」から1662年版の「家の周りを」に変化していることは事実である。しかし、ボグダーノフがドイツ語文からロシア語に翻訳したのかどうかはわかっていない。また、ラテン語文では初版と1662年版のいずれにおいても「doma」という単語が使用されているのであるが、domaには「家」と「屋根」との両方の意味が有り、どちらとも理解できるのである。したがって、この箇所も1662年版を参照したという決め手には必ずしもならないのである。

また、第84章「車両」の初版のドイツ語文において、「十二の外縁と同数の輪鉄から組み立てられた輪がこれを取り巻いています」という文が見られた。これに相当するゴンザ訳は欠落しているのであるが、ボグダーノフのロシア語訳では「すべてを六本の外縁が囲んでおり、それらが車輪を押さえている」となっている。この箇所は、ラテン語文では初版も1662年版も「六つ」で変わらないのであり、初版のドイツ語文で「十二」と記していた誤りを1662年版では「六つ」に訂正している。これは、ボグダーノフの訳は正確であるのに初版のドイツ語文の誤りのために生じた違いであるから、この箇所からもボグダーノフが参照した版を推定することはできない。

次に、第103章「天球」のロシア語訳では「二つの軌道の輪は太陽の運行の境界のようなもので、一つは太陽が巨蟹宮に、別のもう一つの輪は磨羯宮に入るもので、各々昼が最も長いもの、夜が最も長いものである。最後に北と南の二つの軌道である」となっており、ゴンザの訳でも「フタツ マワ ル フト ツ ダクメ マフトツノ タ ヤギ ナガカフィ ナガカヨル シマフシ ソゲニ サ ケナンド ナガユルコト フィノ（二つ 回る 輪 一つ 蝦に、もう一つのは 山羊に、長か日 長か夜 仕舞う衆、其様に 境等 流ゆる事 日の）イッチノチャフタ ツ ノト ワナンド キ タント ファ イェント（後は 二つ полюс（極）の と 輪等 北のと 南風のと）」となっている。これらの訳は、いずれも初版よりも1662年版に近い



文である。

第107章「地球」では、ゴンザの訳だと「ウィエン フィロカ コト マルカ モンノ ギダン（上の 広か事 丸か物の 地面の）」と「シタン フィ ロサ マルカ トント ギダント（下の 広さ 丸かとのと 地面のと）」となっており、上と下というような1662年版を連想させる表現を使用しているものの、前者を第107章、後者を第108章という具合に分割しており、これは初版にも1662年版にも見られない新たな特徴である。

実は先に紹介した江口氏の記述が、ゴンザの訳に関連して1662年版に言及していたのは、それが初版と大きく異なる第138章「王の尊厳」の最後に追加されている文章を引用した後であった。もう一度その箇所に戻ると江口氏は、次のように述べている。「この『図解感覚世界』（『世界図絵』）の底本となった版は1662年ラテン語・ドイツ語対訳版か、それに近い本文を持つ一本ではないか。/本資料139章に通行『図解感覚世界』（『世界図絵』）には見られない、以下のようなロシア語本文がある（以下のロシア語文の引用は省略する——引用者）。/『OPERA OMNIA』によれば1662年版に以下の異文（ドイツ語部分）があるが、上記はこれを直訳したものであると思われるからである。」

たしかにこの第138章の違いは大きい。しかし、これまで見てきたようにボグダーノフのロシア語訳とゴンザの訳とが初版よりも1662年版に類似しているのは、本文では結局この第138章と第103章「天球」の二つの箇所にとどまっている。その他の箇所、すなわち第9章「大地の作物」、第19章「家禽」及び第84章「車両」の章のドイツ語文の相違からは底本の手がかりを得ることはできなかった。

以上のことからボグダーノフとゴンザの訳は、1662年版を底本とするものであるとは必ずしも特定できず、それに影響を受けたその後に出版された版の可能性もあると筆者は推察する。そしてその一つとして1685年にLeutschoviae（スロヴァキアのレヴォチャ）で出版されたラテン語——ドイツ語——ハンガリー語——チェコ語の4ヵ国語版を検討する必要性を提唱し、以下に若干の考察をする<sup>13)</sup>。

#### 4. 1685年出版の4ヵ国語版の補足検討

1685年版では、まず第37章の挿絵の女性の描き方が、1662年版と男女の配置は異なるけれども、長い髪の毛で身体の前を隠すという意匠が、初版よりもよく似ており、1662年版の影響を感じさせる（図3参照）。巻末に「アルファベットによる章索引」と膨大な「単語索引」が添付されていることも1662年版と同じである。しかし4ヵ国語対訳版ということもあってか、本文中の単語を抽出する欄は存在しない。形式面での比較はこの程度にして、肝心の本文の記述を見ることにしよう。

まず第9章「大地の作物」では、「畑」を修飾するような語句は見られず、初版及びゴンザの

表1 『世界図絵』各版の主な特徴

項目 \ 版	1658年初版	1662年対訳版	1685年4ヵ国版	1739年ゴンザ訳
挿絵	有り	有り	有り	無し
章索引	有り	有り	有り	有り
単語索引	無し	有り	有り	無し (改訂版に有り)
単語欄	無し	有り	無し	有り (単語多数抽出)
第9章	畑	耕された畑 (ドイツ語文)	畑	ファラ(原)
第19章	屋根 (ドイツ語文)	家 (ドイツ語文)	家	イエ(家)
第84章	十二 (ドイツ語文)	六つ	六つ	六つ (ボグダーノフ訳)
第103章	原文	補足有り	補足有り	補足有り
第107章	一つの章	一つの章	第108章と分離	第108章と分離
第138章	原文	追加文有り	追加文有り	追加文有り

(下線部分は、ゴンザ訳と共通するけれども、他の版には見られない特徴を示す)

訳と共通する。

次に第19章「家禽」では、「家の周りを」となっており、江口氏が1662年版について指摘したことがそのままこの1685年版にもあてはまる。

第84章「車両」における外縁の数は、4ヵ国のいずれの言語においても「6」で、ボグダーノフの訳と一致する。

第103章「天球」の二つの回帰線と極軌道の記述にも初版より詳しい補足が1662年版と同様に見られ、ボグダーノフやゴンザの訳と一致する。

第107章を「上の面」、そして「下の面」を第108章として独立させているが、これは初版や1662年版には見られない特徴である。しかもこの方式はボグダーノフやゴンザの訳と一致する。

第138章「王の尊厳」においても1662年版とまったく同様の文章が追加されている。

以上の比較検討から、1685年版は、単語を抽出する欄が存在しないことを除けば、ことごとくがボグダーノフのロシア語訳とゴンザの訳に一致する。また、第107章のように1662年版には見られなかった特徴もある。これらを一覧表にして整理したものが、表1である。検討の結果彼らは翻訳に際して1662年版を直接の底本としたとは決められず、1685年版を含むその後の版に基づいている可能性もあると言える。しかし、そのことによって1662年版の持つ意義が弱まるものではなく、むしろ1685年版を含むその後の版に影響を与えたという点で、間接的にボグ

ダーノフやゴンザの作業にも貢献したことは確かであろう。

最後に、ゴンザの訳の底本を確定するには、サンクトペテルブルグの科学アカデミー東洋学研究所の書庫を調査するのが一番良いのであるが、それが容易に行えない状況では、『世界図絵』の異版本の検討を一つひとつ丁寧に行っていくのも解明の一つの方法であると考える。

#### 注

- 1) 本稿ではチェコ共和国国立博物館所蔵のマイクロフィルムを使用した。ただしこの版には pp. 149 ~ 150, pp. 167 ~ 170, pp. 215 ~ 218 に落丁がある。
- 2) 『世界図絵』を収録している第17巻は、1970年に出版された。巻末の解説では、この全集を「批判版」と称している。JOHANNIS AMOS COMENII OPERA OMNIA (JACOO) 17, 1970.
- 3) ゴンザとコメニウスの関係については、井ノ口淳三「漂流民ゴンザによるコメニウスの翻訳」『追手門学院大学人間学部紀要』第7号、1998年を参照されたい。なお、上村忠昌『漂流青年ゴンザの著作に関する総合的研究』私家版、2001年は、同氏による研究の集大成であり、ゴンザ研究の決定版と言える。
- 4) これまでに15の巻が刊行されているが、いずれも英語による解説はない。これは、コメニウスの著作がラテン語、ドイツ語及びチェコ語によって記されていることによるものであると推察される。ただし、今後もこの編集方針が貫かれるかどうかはわからない。
- 5) クルト・ピルツの研究では、1662年版を第8版と数えている。Kurt Pilz: Die Ausgaben des Orbis Sensualium Pictus, 1967. S. 54.
- 6) 第38章の挿絵中の女性の姿の変化については、井ノ口淳三「教授メディアとしての『世界図絵』」『追手門学院大学文学部紀要』第30号、1994年を参照されたい。なおここでは1777年版と1883年版の挿絵を掲載している。
- 7) ラテン語文の差異は、「読者への助言」の他、以下の章である。11, 12, 17, 28, 34, 38, 39, 40, 42, 43, 49, 72, 74, 79, 82, 83, 90, 91, 95, 99, 103, 105, 107, 116, 117, 136, 138, 145, 147, 148, 150, 結び。  
ドイツ語文の差異は、「アルファベット」の他、以下の章である。4, 6, 7, 9, 10, 11, 13, 14, 15, 16, 19, 20, 21, 26, 28, 30, 31, 32, 33, 34, 36, 37, 38, 39, 40, 41, 42, 43, 44, 45, 51, 53, 55, 56, 58, 61, 62, 63, 65, 66, 67, 68, 69, 70, 74, 75, 76, 81, 82, 84, 85, 86, 88, 89, 91, 92, 93, 94, 96, 97, 98, 99, 102, 103, 106, 107, 108, 111, 112, 114, 115, 116, 122, 125, 127, 128, 130, 131, 132, 138, 139, 141, 142, 143, 144, 145, 146, 147, 148, 149, 結び。
- 8) ラテン語文では、いずれの版でも「doma (家もしくは屋根) の付近を飛びまわります」である。なお以下の下線は、いずれも筆者の強調を示すものである。
- 9) ラテン語文では、いずれの版でも「六つの外縁と同数の輪鉄から組み立てられた輪がこれを取り巻いています」である。
- 10) ボグダーノフとゴンザの訳は、岡山大学の江口泰生教授の文字通りの労作と言うべき翻刻による。『図解感覚世界』鹿児島県立図書館、1998年。
- 11) オリガ・ペトロヴナ・ペトロワによれば、ボグダーノフとゴンザによる『世界図絵』の翻訳には2種類あり、改訂版の巻末156ページから234ページには「この本の文に用いられている言葉の辞書が付けてある」とされる。オ・ベ・ペトロワ、江上修代訳「18世紀前半のロシアにおける日本語」ゴンザ・ファンクラブ会報『ゴンザ』第20号、1997年、24ページ。  
しかし、現在この改訂版の所在は不明であり、その内容を確認することができない。
- 12) 江口泰生『図解感覚世界』鹿児島県立図書館、1998年、4ページ。
- 13) 1685年版の検討は、次の1979年の復刻版を用いて行った。

JOH. AMOS. COMENII: ORBIS SENSUALIUM PICTUS, 1685, LEUTSCHOVIAE (1979, PRAHA).

追手門学院大学人間学部紀要 第12号

本稿は、1999（平成11）年度及び2000（平成12）年度に文部省科学研究費補助金（萌芽的研究課題番号11871040）の助成を受けて行われた研究成果の一部である。共同研究者である本学人間学部佐々木英一教授及び鹿児島工業高等専門学校上村忠昌教授から諸点にわたりご教示をいただいた。鹿児島県立図書館所蔵のゴンザ関係の重要資料について、貸し出しはもちろんのこと写真撮影やコピーをとることも禁じられている状態が続いている中で、お二人のご助力なしに研究をすすめることはできなかった。ここに記して感謝の意を表するものである。

2001年3月31日 受理